この辞典を手にとってくださった方へ

現代は、漢字を〝書く〟ことについては、とても便利な時代です。どんな複雑な漢字でも、キーボードをほんの数回、簡単に操作するだけで、〝書く〟ことができます。昔は一本一本の線を手書きしなくてはいけなかったことを思うと、ほんとうに便利になったものです。

でも、便利すぎて、かえってとまどってしまうことはありませんか？

たとえば、「みる」と入力して、漢字に変換しようとしたとしましょう。すると、デジタル機器はとても物知りで、「見る」なのか「観る」なのか「看る」なのか「診る」なのか、いっぱい候補を挙げて、どれにするか、尋ねてきます。ときには、それとも「視る」にする？「覧る」なんてのもあるよ！　とまで教えてくれることもあります。

そんなに矢継ぎ早に候補を示されると、迷うなという方が無理というもの。そもそも、この六つの「みる」は、どこがどう違うのでしょうか？

「みる」だけではありません。「聞く」と「聴く」と「訊く」だとか、「温かい」と「暖かい」、「探す」と「捜す」などなど、同じ訓読みをする漢字が複数ある例は、めずらしくありません。「さす」「とる」「ひく」のように、漢字の数が一〇を超える訓読みもあるのです。

このように、同じ訓読みをする漢字のグループのことを、「同訓異字（異字同訓）」といいます。本書の目的は、その使い分け方を、できる限りていねいに〝ときあかす〟ことにあります。そのために、次のような点に留意して、執筆・編集しました。

1 四〇九項目、のべ一一六三字の漢字の同訓異字を取り上げて解説。

現在、一般の社会生活で使われる漢字の目安としては、文化審議会が定めた『常用漢字表』があります。この表に含まれる漢字の中で同訓異字が問題になるのは、約一三〇項目、のべ三〇〇字程度。本書では、『常用漢字表』の範囲を大幅に越えて、現在でも使われる可能性がありそうな漢字やその訓読みを、できる限り広く取り上げました。

2 各項目の最初に、使い分けのポイントをまとめて表示。

同訓異字の使い分けには、大きく分けると、漢字の意味がかなり異なるので〝原則として使い分けなければならないもの〟と、意味の違いが微妙だとかそのほかの理由で〝場合によっては使い分けるとよいもの〟という二つのレベルがあります。本書では、各項目の見出しの下に、それぞれを「基本」と「発展」に区別して、短くまとめて掲げました。

3 一つ一つの漢字の意味から説き起こした、読みものとしても読めるていねいな解説。

同訓異字の使い分けを理解するカギは、一つ一つの漢字の意味です。本書では、音読みの熟語やほかの訓読み、部首、成り立ちなどを駆使して、それぞれの漢字の意味を説明し、〝なぜそのように使い分けるのか〟という理由が明らかになるように心がけました。

4 理解を深めるための、約七七〇〇個の豊富な用例。

使い分けの理由がわかったら、次の段階は、具体的な実例で確認することです。本書では、短い中でも文脈が感じられるような数多くの用例を、ゴシック体にして収録しています。どのような場面で、どのような意味で、どのようなニュアンスでその漢字を用いればよいのか、より深く理解することができます。

5 理解を助けるため、各項目に図表を掲載。

漢字の意味の違いには、文章で読むよりも、図や表で見る方が理解しやすい側面があります。本書では、各項目に最低一つは図表を掲載し、同訓異字の使い分けを直感的に理解できるように工夫しました。使い分けについて手っ取り早く知りたい方は、各項目の見出しの下のポイントと、ゴシック体の用例と、この図表とを合わせ見るだけでも、だいたいのところを把握することができるでしょう。

6 判断に迷いやすい場面についても、積極的に言及。

考え方は理解できても、実際に使おうとすると迷ってしまう。同訓異字の使い分けでは、そんなことがよくあります。本書では、そんな悩ましい場面についても積極的に取り上げました。それらでは、漢字を使い分けることで微妙なニュアンスの表現が可能になることもありますし、結局はどちらを使ってもかまわないこともあります。

7 振りがなの必要性やかな書きの推奨についても、注意を喚起。

いくら適切に同訓異字を使い分けることができても、その漢字を読み手が読めないので

は、意味がありません。本書では、一般的な立場から見るとむずかしく感じられる漢字や訓読みについて、適宜、振りがなを付けるなどの配慮をする必要があることや、また、かな書きにする方が落ち着く、といった注意を加えました。

同訓異字の使い分けを理解することは、一つ一つの漢字について深く理解することにつながります。と同時に、自分の書き表したいことを、より適切に表現するための基礎知識ともなります。むずかしい漢字でも簡単に入力できるようになったこの時代、ご自分の文章表現を磨きたいと考えていらっしゃるみなさんに、本書が少しでも役に立つことを願っています。

なお、本書は、『漢字ときあかし辞典』『部首ときあかし辞典』に続く、「ときあかし」シリーズの三冊目になります。前の二冊と同様、出版にあたっては、研究社編集部の高橋麻古さんにたいへんお世話になりました。

また、今回も、金子泰明さんがすてきなデザインでご協力くださいました。そのほか、いつものことですが、印刷・製本・流通・販売・宣伝などなど、本書に関わってくださったすべての方々と、本書を手に取ってくださった読者のみなさんに、心よりお礼を申し上げます。

二〇一六年二月

円満字　二郎

「同訓異字」について

――本文をお読みになる前に

漢字の世界では、いくつもの漢字について同じ訓読みをすることがあります。このことを、「同訓異字（異字同訓）」と呼んでいます。これは、逆に言えば、ある訓読みのことばを漢字で書き表したいときに、使える可能性のある漢字がいくつもある、ということです。

それでは、私たちが実際に漢字を使うとき、そのうちの一つをどうやって選べばいいのでしょうか？

この問いにできる限りていねいにお答えするのが、この辞典の役割です。個別の具体的な事例についてはもちろん本文をお読みいただくわけですが、ここでは、それに先だって、同訓異字の背景や、適切な漢字を選ぶ際の基本的な考え方について、解説しておきます。

音読みと訓読みの違い

同訓異字について考える際、漢字がそもそもは中国語を書き表すために中国で生み出された文字であることは、とても重要です。中国では、今から三三〇〇年くらい前には、すでに文章を書き表すために漢字を用いていました。それが日本列島に伝わったのは、紀元三～五世紀ごろ、今からだいたい千数百年前のことだと考えられています。

当たり前のことですが、当時の漢字には、中国語としての読み方しかありませんでした。そこで、日本列島で暮らしていた人々も、中国語の発音をまねながら、漢字を読んでいたわけです。そこから誕生したのが、「音読み」です。

その経緯をやや単純化して申し上げるならば、たとえば、

《訪》という漢字を中国の人が発音するのを聴くと、「ホウ」と聞こえた。そこで、《訪》は日本語では「ホウ」と読むことになった、という次第です。

それは、現代にたとえると、visitという英語を「ビジット」とカタカナ読みするのと似ています。音読みとは、基本的には、ある漢字の中国語としての発音が、日本語風になまって生まれたものなのです。

この方法は、文明の発展した中国からさまざまなことばを外来語として取り入れるには、とても役に立ちました。「訪問」「来訪」「歴訪」「探訪」といった音読みの熟語の多くは、中国語に由来しています。

しかし、この方法では、もとから日本語として存在していることばを書き表すのには、難があります。そこで考え出されたのが、漢字を「訓読み」することでした。

漢字は、一文字一文字が意味を表しています。その意味を日本語で表現するとすれば、どういうことばになるでしょうか？

たとえば、《訪》という漢字が中国語として表している意味は、日本語では「たずねる」と表現できます。ならば、《訪》をそのまま「たずねる」と読んでしまおう。——そうやって生まれたのが、訓読みなのです。

再び現代に置き換えるならば、これは、visitという英語を、そのつづりのままで「たずねる」と読んでしまうことに相当します。なかなか大胆な発想ですが、この方法によって、漢字は、日本語を書き表す文字として、活用の場が飛躍的に広がったのです。

同訓異字が生じるわけ

以上をまとめると、訓読みとは、ある漢字が中国語として表している意味を、日本語に置き換えて読む読み方である、ということになります。訓読みとは、いわば「翻訳読み」なのです。

しかし、ここで大きな問題に突き当たります。それは、ある言語のある単語と別の言語のある単語とは、一対一で対応しているような単純な関係ではない、という問題です。

日本語の「たずねる」は、確かに、英語のvisitに相当する意味を持っています。それは、詳しく説明すれば、〝ようすを見るためにある場所に行く〟ということです。

しかし、日本語「たずねる」は、〝答えを得るために何かを問いかける〟場合にも使われます。この意味は、英語ならば、たとえばaskで表されます。つまり、日本語「たずねる」の意味は、英語ならばvisitとaskの両方の意味に対

応しているわけです。

となると、日本語「たずねる」を英語に翻訳する際には、少なくとも visit か ask のどちらかから一つを選ばなくてはならないことになります。

同じようなことが、漢字の訓読みでも起こります。漢字《訪》は、英語の visit とよく似ていて、〝ようすを見るためにある場所に行く〟ことを表します。これに対して、英語の ask に近い、〝答えを得るために何かを問いかける〟ことを表す漢字には、《尋》があります。そこで、《訪》も《尋》も、「たずねる」と訓読みできることになるのです。

同訓異字とは、このようにして生じるものです。その背景には、中国語と日本語の違いがあります。中国語では、《訪》と《尋》という別のことばで表す行動を、日本語では、どちらもひっくるめて「たずねる」と表現することができる。そういうものごとのとらえ方の違いが、同訓異字となって現れているわけです。

そこで、同訓異字を使い分けるためには、まず、それぞれの漢字が表している中国語としての意味を、きちんと理解する必要があります。その上で、自分が使おうとしている日本語が、どんな意味内容を持っているかを考えて、それに合う漢字を選べばいいわけです。

漢字の本来の意味をつかむために

それでは、それぞれの漢字が表している中国語としての意味をきちんと理解するには、どうすればよいのでしょうか。それには、いくつかの方法があります。

①その漢字を含む音読みの熟語を思い浮かべる。

先に申し上げたように、音読みとは元をたどれば中国語の発音であり、音読みの熟語の多くは中国語に由来しています。ですから、音読みの熟語に現れている意味は、その漢字が中国語として持っている意味だ、と考えてもよいわけです。

《訪》ならば、先に挙げた「訪問」「来訪」「歴訪」「探訪」など。これらの全体に共通する意味を考えれば、漢字《訪》の基本的な意味は〝ようすを見るためにある場所に行く〟ことだ、と見えてきます。その際、思い浮かべる熟語が多い方が、〝証拠〟が増えて、意味をより明確につかめることになります。

②その漢字の別の訓読みを探してみる。

《訪》は、「おとずれる」と訓読みすることもあります。ということは、漢字《訪》が表している意味は、日本語では「たずねる」にも「おとずれる」にも翻訳可能だという可能性があります。

そこで、「たずねる」の中でも「おとずれる」と重なるような意味合いを考えることで、《訪》の意味を考えることもできます。このように、ほかの訓読みを持つ漢字の場合には、それを参考にすることで、意味をより明確にとらえることができる場合があります。

③その漢字の成り立ちを調べる。

一方、《尋》については、よく使われる音読みの熟語は「尋問」くらいしかありませんし、ほかの訓読みもないので、これらの方法は役に立ちません。そういう場合には、漢字の成り立ちから意味に迫る方法があります。

《尋》は、成り立ちとしては「左」と「右」を組み合わせた形が変化したもので、字の形の中に「工」と「口」が含まれているのが、その名残です。そこで、左手と右手を広げるところから、本来は〝長さを測る〟という意味だったと考えられています。

これが変化して〝答えを得るために何かを問いかける〟という意味になった、と筋道を付けて理解すれば、《尋》の基本的な意味がすっきりと頭の中に入るでしょう。

④その漢字の部首に着目する。

とはいえ、漢字の成り立ちを知るためには、漢和辞典を調べなくてはなりません。しかし、そこまでしなくても、同訓異字の中には、部首に着目するだけで使い分けが格段にわかりやすくなるものもあります。

たとえば、《送》と《贈》は、どちらも「おくる」と訓読みします。このうち、《送》の部首は「辶(しんにょう、しんにゅう)」。これは、《進》や《退》にも含まれているように、〝移動〟を表します。一方、《贈》の部首は「貝(かいへん)」。こちらは、《財》《買》《費》などの部首でもあり、〝金品〟を指しています。

ここから、《送》の意味の中心は〝何かを相手のところまで移動させる〟ことにある、と判断できます。それに対して、《贈》は、〝貴重なものを相手にプレゼントする〟ところに重点がある漢字だと、導き出すことができます。

同訓異字の二つのレベル

この辞典では、以上のようなさまざまなアプローチを用いて、それぞれの漢字が持つ基本的な意味を明らかにし、同訓異字の使い分けを説明していきます。ただ、「たずねる」と訓読みする《訪》《尋》や、「おくる」と訓読みする《送》《贈》のように、比較的はっきりと意味が区別できるものは、実際は少数派です。

たとえば、「あお」と訓読みする漢字には、《青》のほか、《蒼》《碧》もあります。《蒼》と《碧》はそれぞれ独特の色合い

を指しますが、それらも「あお」の一種であり、《青》と書き表しても、的外れではありません。

また、《始》と《創》は、どちらも「はじめる」と訓読みします。しかし、《始》は広く一般的に使われるのに対して、《創》は、〝新しいものごとを〟という意味合いを含む場合にだけ用いられます。つまり、《創》が表す意味は、《始》の意味の中に含まれます。

ということは、《創》の代わりに《始》を使っても、間違いにはならないわけです。ただ、〝新しいものごとを〟というニュアンスをはっきりと表現したい場合だけ、《創》を用いればよいのです。

このように、同訓異字の使い分けの中には、少なくとも二つのレベルがあります。一つは、《訪》《尋》や《送》《贈》のように、原則として使い分けなければならない、というレベル。もう一つは、《青》に対する《蒼》《碧》、《始》に対する《創》のように、場合によっては使い分けた方がよい、というレベルです。

〝使い分けなければならないもの〟は、きちんと理解して、注意して使い分ける必要があります。しかし、〝場合によっては使い分けた方がよいもの〟については、無理をする必要はありません。ただ、〝場合によっては使い分けた方がよいもの〟をうまく使うと、微妙なニュアンスの表現が可能になり、自分の表現したいことをより適切に伝えることができるようになります。

本書では、各項目の見出しのすぐ下に、使い分けのポイントを短くまとめてあります。その際、〝使い分けなければならないもの〟を「基本」として、〝場合によっては使い分けた方がよいもの〟を「発展」として示しておきました。

この違いを意識していただければ、同訓異字の使い分けがさらにわかりやすくなることでしょう。

◆◇◆この辞書のきまり◇◆◇

1　使い分けがまぎらわしくなりやすい同訓異字のうち、現在でも使われているものや、使ってみるとよさそうなものを選び、五十音順に配列しました。

2　見出しは、「あう」と「あわせる」は別にするが「あがる」と「あげる」はひとまとめにするなど、説明のしやすさを優先して立ててあります。

3　「あがる／あげる」のように、複数の語を一つの見出しにまとめた場合は、適宜、最初に挙げたもの以外の形も参照見出しとして掲げ、探しやすいようにしました。

4　記述の中で漢字そのものを取り上げる場合には、《　》を使って表示しています。

5　《　》の漢字が各項目で最初に出て来る際には、音読みを振りがなとして示しました。ただし、日本で作られた漢字には音読みがないので、訓読みをカッコに入れて示してあります。

漢字の使い分けときあかし辞典

あ

あう

遇逢遭会合

基本1 一致する場合、調和する場合、一緒に何かをする場合は、《合》を用いる。

基本2 面と向かって話などをする場合は、《会》を使う。

基本3 事件や災難を経験する場合は、《遭》を書く。

発展1 《会》の代わりに《逢》を使うと、貴重さを表現することができる。

発展2 たまたま出くわす場合には、《遇》を使ってもよい。

ものと人と災難と…

「あう」と訓読みする漢字はたくさんあるが、中心となるのは、《合》《会》《遭》。基本的には、この三つを使い分ければよい。

まず、《合》は、〝容器〟を表す四角形の上に、〝ふた〟を表す「亼」を組み合わせた漢字。容器とふたがぴったりと一つになるところから、〝一つになる〟ことを表す。「合同」「合体」「総合」「連合」などがその例である。

転じて、「合格」「適合」「整合性」のように、〝一致する〟ことや〝調和する〟という意味をも表す。さらには、「合唱」「合奏」「合議」など、〝一緒に何かをする〟ことを指す場合もある。

ここから、「あう」と訓読みして、〝一致する〟〝調和する〟という意味で使われる。**「気が合う」「答えが合う」「服のサイズが合う」「壁紙に合うカーテンを探す」「条件に合う物件が見つかる」「薬が体質に合わない」**などなどが、その例である。

また、日本語「あう」には、「○○しあう」の形で〝お互いに○○する〟ことを表す用法もある。この場合も、〝一緒に何かをする〟という意味を生かして、漢字では《合》を使って書き表す。例を挙げれば、**「愛し合う」「認め合う」「殴り合う」「向かい合う」**といった具合となる。

次に、《会》の中心となる意味は、「会議」「会合」「集会」「宴会」など、〝人が集まって話などをする〟こと。ここから、**「友達に会う」「専門家に会って話を聞く」「その人とは会ったこともない」**のように、〝人と人とが面と向かって話などをする〟場合に用いられる。

三つ目の《遭》は、〝移動〟を意味する部首「辶（しんにょう、しんにゅう）」の漢字で、本来は〝移動している途中に予定外

のものに出くわす〟ことを表す。ただし、「遭難」のイメージが強く、実際には、「ひどい目に遭う」「暴風雨に遭う」「詐欺の被害に遭う」など、〝事件や災難などにみまわれる〟ことを意味する「あう」を書き表すのに用いられる。

その瞬間から別れが始まる…

《合》《会》《遭》のほか、「あう」と訓読みする漢字としては、《逢》と《遇》もある。この二つは、《会》の代わりに特別なニュアンスを表したい場合に使われる。

《逢》は、漢詩では、旅の途中でたまたま一緒になってまた別れる、というような使い方が多く、〝一緒にいる時間が貴重である〟というニュアンスを持つ。日本語でも、「逢い引き」「逢瀬」のように、恋人たちが一時的に「あう」場合によく用いられる。

そこで、「あう」ことの〝貴重さ〟に重点を置きたい場合に用いるのがふさわしい。たとえば、「初恋の人に逢う」「二〇年ぶりに旧友に逢う」「旅先で逢った人を思い出す」といった具合である。

一方、《遇》は、「偶」と形が似ていて、〝偶然でくわす〟という意味がある。「遭遇」という熟語があるように、《遭》の本来の意味との違いはほとんどない。ただし、《遭》のようにマイナスのイメージが強くはないので、「沖に出たところでイルカの群れに遇った」のように、事件や災難ではないものに〝偶然でくわす〟場合に適している。とはいえ、やや特殊な訓読みなので、振りがなを付けるなどの配慮をしておく方が、親切である。

さまざまな「であい」がある

「あう」の使い分けとして、悩ましいケースに「であう」がある。このことばは、〝お互いに出る〟という意味で「出合う」と書くのが本来の形。「国道と県道が出合う場所」のような場合には、人と人との関係ではないので、この書き方がぴったりくる。

しかし、人と人とが「であう」場合は、「彼に出会ったのは学生時代のことだった」のように、《会》を用いる方がしっくりくる。これを、《遭》を使って「彼に出遭ったのは学生時代のことだった」と書くと、その「彼」が厄介な人物だったことになる。

もちろん、《逢》や《遇》を用いることも可能。「彼に出逢ったのは学生時代のことだった」とすれば、その後の恋愛や友情を想像させるし、「彼に出遇ったのは学生時代のことだった」だと、その「であい」が偶然だったことが強調されることになる。

○○が	○○に	あう	備考
人間以外	人間以外	合	
人間	人間（時に動植物なども含む）	会	
		逢	貴重さ
		遇	偶然性
人間	事件・災難	遭	

なお、「あわせる」と訓読みする場合も、考え方は「あう」と同じ。ただし、「あわせる」とだけ訓読みする漢字に《併》があり、これと《合》との使い分けが問題になる（p 48）。

あお

碧蒼青

基本 一般的には《青》を用いる。

発展1 生気のない「あお」、厳粛さや不安、神秘性を出したい場合には、《蒼》を使ってもよい。

発展2 緑がかった「あお」、硬質な輝きや透明感を表したいときには、《碧》を書いてもよい。

いつも同じじゃつまらない！

色の一つを指す日本語「あお」を書き表す場合に、最も一般的に使われる漢字は《青》。「青空」「青い海」「隣の芝生は青い」「水銀灯が青くゆらめく」「青筋を立てて怒る」などはもちろん、「財布を落として青くなる」「これくらいで怖じ気づくとは、君もまだまだ青いな」のような比喩的な用法でも、《青》を書いておけばまず問題はない。

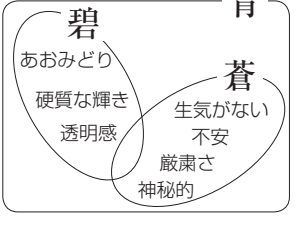
ただし、色の「あお」を指す漢字には《蒼》《碧》もあり、ニュアンスに応じて使い分けることもできる。ただし、どちらも現在ではあまり使われない漢字なので、振りがなを付けるなどの配慮をしておくと、丁寧である。

《蒼》のイメージは、「木々が鬱蒼と茂る」という例を思い浮かべるとつかみやすい。〝植物〟を表す部首「艹（くさかんむり）」が付いているように、本来は、分厚く生い茂った植物の暗い「あお」を指す。ここから、《蒼》は、「顔面蒼白」のように生気のない「あお」をも表す。そこで、「病気で蒼白い顔をしている」「幽霊が出ると聞いて蒼ざめる」などでは、《青》に代わってよく用いられる。

また、《蒼》には「蒼海」「蒼天」のように大自然を指す熟語もあり、見る者を厳粛な気分にさせたり、不安にさせたりする「あお」だといえる。それを生かして、「砂漠の真ん中で蒼い空を見上げる」「嵐のあとには、何ごともなかったかのように蒼い海が広がっていた」「その山には蒼い月がかかっていた」といったふうに用いると、厳粛さや不安、神秘的といったイメージが伝わって、効果的である。

一方、《碧》は、部首「石（いし）」にも現れているように、もともとは〝あおみどり色の宝石〟を表す漢字。「みどり」と訓読みすることもある（p 531）。そこで、「あお」と訓読みする場合でも、「春になって草原が碧く染まる」のように、緑がかった「あお」を指して使われる。

また、《碧》は、宝石のような硬質な輝きや透明感を重視して



「あお」を表現するのに適している。「丘の上から碧い湖が見える」「雨に洗われたような碧い空が広がる」「彼女の指には碧いサファイヤが輝いていた」などが、その例となる。

このように、《蒼》と《碧》は、同じ「あお」でも方向性がかなり異なる。使い分けに悩むとすれば、たとえば、透明でかつ神秘的な〝あお〟を表現したい場合。「彼の謎めいた碧い瞳に惹かれる」と書けば、澄んだ瞳の魅力に重点が置かれ、「彼の謎めいた蒼い瞳に惹かれる」だと、謎めいた雰囲気が強調された表現になる。

とはいえ、この違いはかなり微妙なので、こだわりすぎないように注意したい。

あか

赭朱紅赤

基本 一般的には《赤》を用いる。

発展1 華やかさやあでやかさを強調したいときには、《紅》を使うと効果的。

発展2 目立たせたい場合には、《朱》を用いると効果的。

発展3 特に、くすんで赤い顔色を指す場合には、《赭》を使うこともできる。

万能選手と派手好みの女性

色の一つを指す日本語「あか」を漢字で書き表すには、《赤》を用いるのが基本。「赤い花」「赤い屋根の家」「恥ずかしくて顔が赤くなる」「夕日で山が赤く染まる」「鉄が赤く錆びる」などはもちろん、「赤の他人」「赤っ恥をかく」のような比喩的な用法も含めて、どのような「あか」でも、《赤》を書いておけば問題はない。

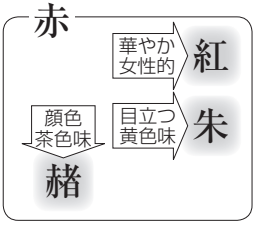
しかし、「あか」と訓読みする漢字は、ほかにもある。それらは、表現したい内容に応じて使い分けることになる。

中でも、比較的よく使われるのが《紅》。部首「糸（いとへん）」が付いている通り、本来は糸を染めるのに使う染料の濃い「あか」を指し、転じて、「口紅」「頬紅」など、「べに」と訓読みしても使われる。衣服や化粧などと関係の深い漢字であり、「あか」と訓読みする場合でも、華やかさやあでやかさを強調したい場合に使うと、効果が高い。

具体的には、「ゴージャスな紅い絨毯」「バラの紅い花」「秋が深まり山全体が紅く色づく」「ネオンが紅く輝く」など。また、「紅い振袖」「紅いマニキュア」「女性ファンが紅い涙をしぼる」など、女性と結び付いて使われることも多い。

まわりと比べてくださいな

《紅》ほど多くはないが、《朱》も、「あか」と訓読みして使われることがある。この漢字は、本来は、黄色がかった「あか」の「朱色」を表す。そこで、「神社の朱い鳥居」のように、黄色がかった「あか」を指す場合に使うことができる。ただ、やや特殊な読み方になるので、振りがなを付けるなどの配慮をしておくと、親切である。



また、「朱筆を入れる」「朱印を押す」など、朱色は何かを目立たせるために使われる。ここから、《紅》がそれ自身の色を強調するのに対して、《朱》は、他のものの色と比べて「あか」を目立たせるはたらきをすることが多い。

そこで、たとえば唇のあでやかさそのものを表現したい場合には、「彼女の紅い唇が忘れられない」と書くと雰囲気が出る。肌や歯の白さと対比して唇を描き出したい場合には、「病み上がりの肌に、朱い唇が浮き立って見える」とするのがふさわしい。

最後に、《赭》は、本来は塗料に使う土の色で、茶色に近い「あか」を表す。「代赭」とは、いわゆる「あかつち」のことをいう。

転じて、現在では、主に顔色について用いられる。「赭ら顔の男性」「酔って顔が赭くなる」などがその例。ただし、むずかしい漢字なので、振りがなを振るなどの配慮を忘れないようにしたい。

なお、漢字本来の意味からすると、《赭》が表すのはくすんだ「あか」。ピンク色の顔を表したい場合には、「湯上がりの紅い顔」のように、《紅》を使う方がしっくりくる。

あがなう

贖購

基本 一般的には《購》を用いる。

発展1 努力や犠牲を払う場合には、《購》を使ってもよいが、かな書きの方が落ち着く。

発展2 罪の許しを得る場合には、《贖》を書くと、意味合いがはっきりする。

お金だけでは解決できない！

日本語「あがなう」は、〝何かと引き換えに貴重なものを手に入れる〟ことを指すことば。このことばを漢字で書き表す場合には、《購》を用いるのがふつうである。

《購》は、〝金品〟を表す部首「貝（かいへん）」の漢字で、「購入」「購買」のように、〝お金を払って手に入れる〟ことを表す。そこで、「あがなう」と訓読みして、「食費を削って子どもの薬を購う」「大金を投じて豪邸を購う」「愛はお金では購えない」などと使われる。

「今日の平和は先人たちの血と涙によって購われたものだ」のように、〝努力や犠牲と引き換えに貴重なものを手に入れる〟場合も、比喩的な表現として、《購》を書いてかまわない。しかし、こういう場面で〝お金〟のイメージが強い《購》を用いるのには、抵抗もある。そこで、「今日の平和は先人たちの血と涙によってあがなわれたものだ」とかな書きにしておくのも、おすすめの方法である。

購
貴重なものを手に入れる

贖
罪の許しを得る

ところで、「あがなう」と訓読みできる漢字には、もう一つ、《贖》もある。こちらも、部首「貝」の漢字で、本来は〝保釈金を払って釈放してもらう〟という意味。「贖罪」とは、〝お金を払って罪の許しを得る〟ことをいう。

ここから、特に〝何かと引き換えに罪の許しを得る〟場合には、《贖》を使うと〝罪〟のニュアンスを強調することもできる。例としては、「賠償金を支払って被害を贖う」「まじめに刑期を勤めて罪を贖う」など。もっとも、これらの場合に《購》を書いても、もちろん問題はない。

あからむ

赭紅明赤

基本1 色が「あか」になる場合は、《赤》を用いる。

基本2 日光が差す場合は、《明》を使う。

発展1 華やかさを強調したいときには、《紅》を用いると効果的。

発展2 顔色がくすんだ「あか」になる場合には、《赭》を使ってもよい。

朝夕だけがちょっと問題？

日本語「あからむ」には、色が〝あかくなる〟場合と、日光が差して〝あかるくなる〟場合とがある。これらを漢字で書き表す際には、《赤》と《明》の意味に従って使い分ける。色の場合は「熱が出て顔が赤らむ」「リンゴの実が赤らむ」、日光の場合は「日の出が近づき空が白々と明らむ」「夕日で西の空が赤らむ」となる。この使い分けは、さほどむずかしくはない。

悩むとすれば、夕焼けや朝焼けで空が〝あかくなる〟場合。「夕日で西の空が赤らむ」とすると色合いが強調され、「夕日で西の空が明らむ」と書けば、暮れなずむ中に西の空だけが輝きを残していることになる。

このほか、色の場合には、「あか」（p16）の使い分けに準じて、《赤》の代わりに《紅》や《赭》を用いることもできる。「恥ずかしさで顔がぽっと紅らむ」「春が近づきイチゴの実が紅らむ」など、華やかさを強調したい場合には《紅》を使うのが効果的。《赭》は、顔色がくすんだ〝あか〟になる場合に用い、「お酒の飲み過ぎで顔が赭らむ」「日に焼けて赭らんだ顔」などがその例となる。

なお、同様に考えて《朱》を用いることもできるはずだが、実際の用例はほとんどみかけない。また、《赭》はむずかしい漢字なので、振りがなを付けるなどの配慮が必要となる。

色の場合
赤
紅
赭

日光の場合
明
朝焼け
夕焼け

あかり

灯明

基本1 ほとんどの場合は《明》を用いる。

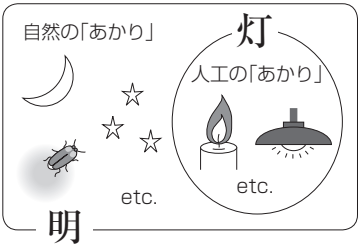
基本2 特に、人工的な照明であることをはっきりさせたい場合は、《灯》を使う。

自然の光と人工の光

《明》は、言うまでもなく、〝光がたくさん差している〟ことを表す漢字。ふつうは「あかるい」と訓読みする。そこで、〝差してくる光〟という意味で、「あかり」とも訓読みして、広く用いられる。

「庭に月明かりが差す」「雪明かりの夜道を歩く」などがその例。「明るいランプ」のような使い方があることを考えれば、「ランプの明かり」のように人工的な「あかり」に対して《明》を用いても、おかしくはない。

一方、《灯》は、「灯台」「灯籠」「街灯」「提灯」など、〝人工的な照明器具〟を指す。そこで、「部屋の灯りをつける」「夕暮れになって家々の灯りがともり始めた」のようにこの漢字を使うと、人工的な「あかり」であることがはっきりする。



逆に言えば、自然の「あかり」に対しては《灯》は使えない。意地悪な例を挙げれば、「明かりが一つもない真っ暗な夜」では、人工的な照明がないだけでなく、月や星も出ていないわけだから、《明》を用いないとおかしいことになる。

あがる／あげる

騰揚挙上

基本1 ほとんどの場合は《上》を用いる。

基本2 選び出す場合、すべて一緒に何かを行う場合、行事を行う場合には、《挙》を使う。

発展1 注意を引く場合、目立たせる場合には、《挙》を書くと意味合いがはっきりする。

発展2 ふわふわ「あがる」場合、引っ張り「あげる」場合には、《揚》を用いることもできる。

基本3 油で「あげる」場合には、《揚》を書く。

発展3 値段が高くなる場合には、《騰》を使ってもよい。

高い方なら何でもござれ！

《上》は、横線を引いてその高い側に印を付け、何かの〝高い方〟を表す漢字。転じて、〝高い方に移動する〟という意味にもなり、日本語「あがる／あげる」を書き表す漢字として、最も一般的に用いられる。

例としては、「階段を上がる」「給料が上がる」「気温が上がる」「すだれを上げる」「順位を上げる」「値段を上げる」など。「評判

が上がる」「お迎えに上がる」「雨が上がる」「お線香を上げる」「子どもを抱き上げる」「問題として取り上げる」「すごろくの上がり」「今日一日の商いの上がり」などなど、〝高い方への移動〟だと感じられることであれば、何に対しても用いることができる、すこぶる便利な漢字である。

「宿題を仕上げる」「銀行員として勤め上げる」などでは、〝最後までやり遂げる〟という意味。「差し上げる」「存じ上げる」などでは、相手に対する敬意を表すはたらき。これらの「あげる」も、〝高い方への移動〟から転じたものとして、《上》を使って書き表してかまわない。ただ、「プレゼントをあげる」のように〝与える〟ことを表す場合は、〝高い方へ〟という意識が薄れているので、かな書きにすることが多い。

それに対して、《挙》は、以前は「擧」と書くのが正式で、「與」と「手」を組み合わせた漢字。「與」は「与」の以前の正式な書き方で、「与党」「関与」のように〝一緒に〟という意味合いを持っている。

そこで、《挙》は、〝両手を一緒に使って持ちあげる〟という意味になる。ここから〝わざわざ持ちあげる〟というニュアンスが生じ、〝選び出して示す〟という意味で使われるようになった。

たとえば、「例を挙げる」「根拠を挙げる」「芥川賞の候補に挙がる」といった具合。これらの場合、〝高い方へ〟の一種だと考えて《上》を使っても間違いとは言い切れないが、〝選び出して示す〟という意味をはっきりさせるため、《挙》を用いるのがふつうである。

また、《挙》は、〝わざわざ持ちあげる〟ところから、〝注意を引く〟という意味合いも持つ。ただ、この場合には、《上》との使い分けが微妙となる。

ねえねえ！こっちを見てよ

たとえば、《上》を使って「手を上げる」と書けば、単に手を上の方に伸ばすこと。これが、「手を挙げる」のように《挙》を用いると、〝こちらに注意を向けてください〟という意味合いで、手を上の方に伸ばしていることになる。

また、「先制点を上げる」のように《上》を書くのは、ふつうの表現。それに対して、《挙》を使って「先制点を挙げる」とすると、〝貴重な得点〟に対する注目を高める効果がある。

そこで、そのものに注意を引きたいという気持ちをはっきりさせたい場合には、《挙》を用いるのがふさわしい。それ以外の場合や、判断に迷った時には、《上》を使っておけばよい。

なお、《挙》には、「挙国一致」「ご家族で挙ってお出かけください」のように、〝すべてが一緒に〟という意味もある。ここから、「あげる」のやや特殊な使い方として、「犯人逮捕に総力を挙げる」「町を挙げて歓迎する」のように、〝すべて

が一緒になって何かをする〝ことを指す用法が生じた。

また、「結婚式を挙げる」に代表されるように、《挙》は、〝一緒に持ちあげる〟ところから転じて、〝行事などを行う〟という意味でも使われる。これらの場合には、〝高い方への移動〟という意識は薄いので、《上》は用いられない。

支えもないのにあら不思議！

次に、《揚》は、音読みでは「飛行船が浮揚する」「気分が高揚する」「国旗掲揚」のように用いる漢字で、〝ふわふわと高い方へ移動する〟ことを表すのが基本。そこで、訓読みでは「気球を揚げる」「凧が大空に揚がる」「旗を揚げる」のように使われる。

また、〝下からの支えなしに高い方へ移動する〟ところから、〝上から引っ張り「あげる」〟場合にも用いられる。「船の荷物を陸に揚げる」がその例。比喩的に、「戦地から引き揚げる」のように使われることもある。

ただし、「あがる／あげる」の世界には万能選手《上》がいるので、「気球を上げる」「凧が大空に上がる」「荷物を陸に上げる」などと書くこともできる。そこで、この場合も、〝ふわふわと〟引っ張って〟といったニュアンスを強調したい場合には、《揚》を用いると考えるとよい。

ちなみに、「花火を上げる」の場合は、下から火薬の勢いで力強く「あげる」ので、《上》を使うのがふつう。そのため、「花火が上がる」も一般的には《上》を用いる。

このほか、「抑揚を付けて朗読する」のように、《揚》には〝声の調子を高くする〟という意味がある。が、この場合は、《挙》との使い分けが微妙になる。「喜びに思わず声を揚げる」と書けば、うわずった声を出すこと。「不満の声を挙げる」のように、〝注意を引きたくて声を出す〟という気持ちが強い場合には《挙》を用いる。もちろん、特別なニュアンスを込めたくない場合には、《上》を使って「声を上げる」と書くこともできる。

なお、《揚》を使って書き表す「あがる／あげる」としては、「天麩羅が揚がる」「鶏肉を油で揚げる」といった例もある。なるほど、天麩羅や唐揚げは、火が通ると油の中で浮いてくる。この用法については《揚》で書き表す習慣が定着しており、さすがの万能選手《上》も、お呼びではない。

最後に、特に〝価格が高くなる〟場合に、《騰》を用

	上	挙	揚	騰
すべて／何かを／一緒にする		◎		
行事などを行う		◎		
その他一般	◎			
価格が高くなる	○			○
油で「あげる」			◎	
声を高くする	○	○	○	
引っ張り「あげる」	○		◎	
ふわふわと高い方へ	○		◎	
注意を引く	○	◎		
選び出して示す	△	◎		

いることがある。この漢字の部首は「馬（うまへん）」で、本来は、〝馬が力強く跳ねる〟という意味。「沸騰」のように用いられ、《揚》とは対照的に、下から力強く〝押す〟というニュアンスが強い。そこから、〝価格が高くなる〟という意味になったと思われる。

この場合も、《上》を使って「物価が上がる」「値段が上がる」と書いてもよい。しかし、「物価が騰がる」「値段が騰がる」と書くと、押さえようのない力で高くなっていくという意味合いを込めることができる。ただし、現在ではあまり使われない訓読みなので、振りがなを付けるなどの配慮をしておくことが望ましい。

あきる

倦厭飽

基本 一般的には《飽》を用いる。

発展1 投げ出したい気持ちや、遠ざけたい気持ちが強いときには、《厭》を使ってもよい。

発展2 疲れた、困ったという気持ちが強いときには、《倦》を書くこともできる。

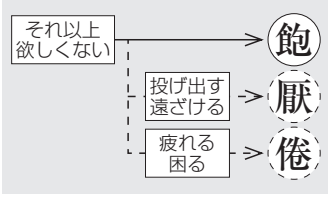
十分にいただきました…

《飽》は、部首「食（しょくへん）」の漢字で、本来は〝お腹いっぱいに食べる〟ことを表す。転じて、〝満足してそれ以上欲しくなくなる〟という意味となる。そこで、「あきる」と訓読みして、「中華料理ばかり続くとさすがに飽きる」「勉強に飽きたので散歩に出る」「この映画は何回見ても飽きない」のように用いられる。

日本語「あきる」を漢字で書き表すときには、《飽》一つで用は足りる。しかし、「あきる」と訓読みする漢字には《厭》と《倦》もあり、微妙な意味合いを生かして使い分けることもできる。ただし、どちらもむずかしい漢字なので、振りがなを付けるなどの配慮をしたい。

《厭》では、〝投げ出したい〟とか〝遠ざけたい〟といったニュアンスを含むのが特徴。〝世間から離れたい〟気持ちを表す「厭世」や、〝戦争をしたくない〟ことを意味する「厭戦」に、そのニュアンスがよく現れている。

ここから、たとえば、「言い訳を聞くのはもう飽きた」だと単純な表現だが、「言い訳を聞くのはもう厭きた」と書くと、言い訳している相手に対する強い嫌悪までが表される。また、「職場の人間関係に厭きがきた」ならば、たとえば〝転職したい〟という思いが想像されるが、「職場の人間関係に飽きがきた」では、そこまでの強い表現にはならない。



一方、《倦》では、「あきた」結果として、本人が疲れたり困ったりするところに重点がある。「倦怠」とは、